

寺田寅彦の読まれ方

竹田 正雄

今般の東北地方太平洋沖地震に際しては、全国各地から物心両面にわたる心温まるご支援やお見舞いの言葉をいただいた。被災地のひとりとして心からお礼申し上げます。

さて今回の大震災を受けて、寺田寅彦が再び脚光を浴びている。各マスコミで「寺田の警句のとおり」と取り上げられる機会が増えたほか、岩波文庫の「寺田寅彦随筆集」はまだしも、講談社学術文庫の「天災と国防」、角川ソフィア文庫の「天災と日本人 寺田寅彦随筆選」、中公文庫の「地震雑感／津浪と人間」までもが書店の特設コーナーに平積みになっているのを見ると、寺田寅彦ファンとしてはなんとなく誇らしいような、面映いような複雑な感じがする。若いファンを広げるうえではよいことなのだが、大災害を受けてという点からすればなおさらである。

ところで、平成 23 年 10 月 1 日付けの日本経済新聞朝刊の東北経済面に次のような記事が掲載された（たぶん東北地区限定の記事）。これは「地域再生 震災が問う」というシリーズの 5 回目で、「碩学の警句今生かす」というタイトルと寺田寅彦の写真付の記事である。その一部を以下に引用する。

寺田は津浪の被害についても調査し、警鐘を鳴らしている。

「東北日本の太平洋岸に津浪が襲来して沿岸の小都市村落を薙ぎ倒し、多数の人命と多額の財物を奪い去った。」1933 年の昭和三陸大津波をみて、寺田が書き残した「津浪と人間」という随筆の書き出しだ。

そこで寺田は高台に一度移住しながらも、不便だからと低地に戻った人々を批判している。「鉄砲の音に驚いて立った海猫がいつの間にかまた寄ってくるのと区別はない。」と痛烈だ。

小生が気になったのは、「寺田は高台に一度移住しながらも、不便だからと低地に戻った人々を批判している」（下線は筆者）のくだりである。確かにこの部分は「津浪と人間」の冒頭の一文であるが、寺田がこの随筆で主張したかったのは、「災害を未然に防ぐことが出来て居てもよさそうに思はれる」としながらも「それが実際は中々そうならないといふのが此の人間界の人的自然現象である」と言っただけで、「日本国民の此等災害に関する科学的知識の水準をずっと高めることが出来れば、其時にはじめて天災の予防が可能になるであろう」ということである。つまり、決して「批判」したものではなく、人間はそういうものであると認めただけで、教育の重要性を説いたものであろう。寺田の人間を見る目の優しさが感じられる文章だと思う。

小生は住所・氏名と友の会会員であることを明記のうえ、この点についての見解を日本経済新聞仙台支局あてに文書で尋ねた。教育の重要性もそうだが、マスコミの重要性も看過できないのではないかと付記した。それもあってであろうか、本日に至るまで回答は得られていない。（宮城県仙台市青葉区 友の会会員 2011年12月）